

文化高知

2008年1月 NO.141



「朴拭漆銀線象嵌箱」吉光 誠之

〈もくじ〉

高知の豊かさを十倍堪能する方法	竹村 昭彦	2
郷土意識	竹葉 剛	3
音の旅人		
『音の旅人』がくれた幸せ	宇賀加代子	4～5
東洋町歴史年表について	原田英祐	6～7
CAT?こんな美術展もある	小原義也	8～9
高知のギャラリー③		
美しいものと出逢いたい—ギャラリーM2—	中西ルミ子	10
言葉の現場から⑦	岩井信子	11
地の名も無き偉人たち⑦		
日本の資本主義発展に尽力—金子直吉—	広谷喜十郎	12
十一～十二月の事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14～15

高知の豊かさを 十倍堪能する方法

竹村昭彦

高知県はあらゆる経済指標が、全国最下位レベルと言われています。平たく言えば「お金がない」わけですから、「お金がない」から「豊かでない」わけではありません。私は、全国で高知県ほど食材の豊かな県はないと思っております。当然食材の豊かさだけが「豊かさ」の全てではないのですが、「食」は命を育む基本ですから、私は「豊かさ」にとって最も大事なものは「食の豊かさ」と「心の豊かさ」であると考えているのです。

高知県はあらゆる経済指標が、全国最下位レベルと言われています。平たく言えば「お金がない」わけですから、「お金がない」から「豊かでない」わけではありません。私は、全国で高知県ほど食材の豊かな県はないと思っております。当然食材の豊かさだけが「豊かさ」の全てではないのですが、「食」は命を育む基本ですから、私は「豊かさ」にとって最も大事なものは「食の豊かさ」と「心の豊かさ」であると考えているのです。

もちろん、他県にもおいしい食材はいくらでもあります。しかし、①食材そのものの圧倒的な鮮度の良さ、②春夏秋冬・山川海・旬の食材のバリエーションの豊かさ、の二点を重ねれば、高知県が一番であると思っております。そんなことをあちこちで書いたりしゃべったりし

ていましたら、旅行雑誌「じゃらん」が実施した全国一万人旅行者アンケート(二〇〇六年四月〜〇七年三月)で、「地元ならではのおいしい食べ物が多い県」の第一位に高知県が輝きました。まさに「我が意を得たり」で、嬉しいかぎりです。

ところが、一部ネット上に「なぜ高知が？」などと語られているようですので、その証拠として、司牡丹社員がコソソリ教える土佐の旬のうまいもの情報ブログ、「旬どき・うまいもの自慢会・土佐」(<http://tosa-no-umainono.cocolog-nifty.com/blog/>)にて取り上げた高知県ならではの山川海の旬の食材を、以下に一部列挙してみましよう。

〈春〉ドロマ・佐川の山菜・永田農法のトマトとバジル・コシアブラの天ぷら・ハチク

〈夏〉鱈の焼き切り・飛魚の刺身・自根胡瓜・鰻のタタキ・仁淀川や四万十川の鮎の塩焼

〈秋〉大正の長茄子・清水サバ・ツガニ・どんこ椎茸・メジカ新子とブシユカン・四方竹

〈冬〉冬季限定「酒盗」・ウツボのタタキ・クエ鍋・猪鍋・葉ニンニクのスタとブリ刺身

月二回程度更新のブログですが、一年以上三十三回続けても春夏秋冬・山川海の旬の食材ネタは全く尽きることがないのです。手前味噌ですが、これを「地元ならではおいしい食べ物が多い県」の、動かぬ証拠とさせて下さい。そして、本題。：具体的にブログをご覧いただきたいのですが、これらの旬の食材をさらに十倍おいしく堪能する方法があるのです。それは、旬の土佐酒を合わせていただくこと。日本酒は、

日本の旬のお料理のおいしさを倍増させ、効用も高めてくれます。当然土佐の旬のお料理なら土佐酒が一番です。

そして、お酒自体に季節感や旬があるのも日本酒だけなのです。春にはフレッシュな「しぼりたて新酒」、

夏には軽快な「生酒」、秋には旨みタップリに熟成した「ひやおろし」、冬には「燗酒」や「しぼりたて原酒」と、その季節にしか味わえないような旬の日本酒が存在しています。また、通年販売の定番の日本酒であっても、春には「常温」(二十度)や「涼冷え」(十五度)、夏には「花冷え」(十度)や「雪冷え」(五度)、秋には「常温」(二十度)や「人肌燗」(三十五度)、冬には「ぬる燗」(四十度)や「上燗」(四十五度)で、楽しむべし、これまた旬のお料理と、見事な相性を示し、おいしさを倍増させてくれるのです。

酔うために飲む必要も、量を飲む必要もありません。お酒に弱い方なら、グラス一杯でも充分ですから、高知の旬の食材のおいしいお料理を、さらにおいしくしていただくために、土佐酒を上手に活用してみてください。「高知の豊かさを十倍堪能する」という意味が、体験された方には「理解いただけることでしょう。さて今夜は、旨みタップリの鯨のハリハリ鍋と、司牡丹の山廃(やまはい)仕込み純米酒「かまわぬ」のぬる燗で一杯……。

(たけむらあきひこ／司牡丹酒造株式会社代表取締役社長)

郷土意識

竹葉 剛

高校を卒業したあと高知を離れ京都にきたので、もう四十六年間も京都に住んでいることになる。しかし、自分が京都人だと思ったことは一度もない。毎年、高校野球が始まれば、今年が高知はどこが出てくるのか、どこまで行けるか、と期待に胸がふくらむ。郷土の意識は生涯変わることはないのではないか、と思う。

郷土意識がいつどのように育つのか、そのような疑問をもったのは、三人の息子がいずれも高校野球で地元(京都、滋賀)を応援している事に気づいた時である。何か違和感があった、なぜ高知を応援しないのかと、息子達に聞いた覚えがある。彼らの答えは「高知は二番目」であった。それ以来、親の職業の関係で転居を繰り返してきた知人や友人に「高校野球ではどこを応援しますか」と尋ねてみた。すると、幼稚園から小学校低学年時に住んでいた所(府

県)が多いことがわかった。厳密な調査ではないので、一般化することはできないが、郷土意識はやはり幼少の頃に芽生えて育つようである。

郷土意識の形成に何が影響するか。三十年ほど前になるが、京都府北部住民を対象に、定住意識について調査するチームに参加したことがあった。住民アンケート結果を分析すると、「その場所に住み続けたい」という定住意識を支える様々な要因の中で、「生活の利便性」などよりも「その土地の歴史に対する誇り」の占める割合が高かかった。過疎が進み、住民サービスが低下しても、その場所に住み続けたいという思いは非常に強く、それは、ただ単に転居するのが大変だという消極的な理由からではなく、その土地に対する誇りという積極的な理由によることがわかった。

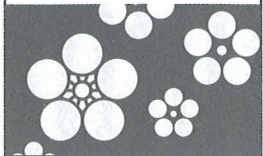
二〇〇七年九月九日、関西高知県人会が京都で開催され、六百余名が参加した。このような県人会が開けるのは、高知、鹿児島、沖縄だけだと聞いた。高知は全国的にも郷土意識の強い土地柄ということになる。豊かな自然に加えて、高知には誇るべき事柄が多い。今や全国に広がった「よさこい」は、高知の踊りの各流派が集まって相談したルールから始まっている、と聞いた。必要なきに、知恵を出し合い工夫する頭のよさと、それを実行するエネルギーとが高知にはある。大いに誇るべき高知人の気質である。

地方の時代と言われるが、多くの自治体には助成金を使って施策を行う余裕はなくなっている。しかし一方で課題は多い。自治体に求められるのは、お金を使わずに知恵とエネルギーとを集める工夫である。県外

在住の高知県出身者の多くは、強い郷土愛を生涯持ち続けている。彼らの経験に基づいた知識と知恵は、高知の貴重な資産である。この資産を有効に活用する手だてはないものか。

今年も春の選抜が楽しみである。

(たけばこう／京都府立大学学長)



音の旅人

『音の旅人』がくれた幸せ
宇賀 加代子

市民ミュージカルは、高知に題材を求め、一般公募による参加者と地元スタッフが一体となって、ひとつの舞台を完成させていく事業である。異世代間の交流や舞台芸術による人材育成、郷土の再発見など、市民ミュージカルの効用は多岐にわたり、高知市文化振興事業団の方々は、私たち参加者の長期間にわたる練習を事務局としてサポートしてくれている。これまでに左記の四作品を制作し、来る二月十日、十一日には、五回目となる『音の旅人』の公演を控えている。

第一回 『RYOMA』（一九八九年）
第二回 『津野山物語』（一九九二年）
第三回 『絵金』（一九九六年）
第四回 『光の中で』（一九九九年）



この友のほかにも、公演を楽しみに応援してくれる友人たちがいる。また、稽古と仕事の調整に協力してくれる上司や同僚、文句を言わず家事を引き受けてくれる家族がいる。今回で二度目となるが、スタッフや劇団の仲間以外にも、こうして私を支えてくれるたくさんの方たちの存在あっての舞台だということに、

◆武政英策さんにスポット
さて、私たちの生活には、テレビCMひとつをとってみても音楽が溢れ、携帯電話からも歌が流れる時代になった。もちろん、音楽が好きな人、得意な人、そしてそうではない人と、音楽に対する見方やかわり方は様々だろうが、私たちが音楽に初めて触れた「その時」は、一体どんな風景であつただろうか、このミュージカルの稽古を始めてから考えるようになった。

私の場合、きっとそれは母の子守唄だっただけで、覚えていないはずもなく、母が初めて買ったレコード『星影のワルツ』を何度も聞いたのが一番古い記憶になる。「歌は世に流れ世は歌につれ」という言葉がふいに思い出された。幼い私に『星影のワルツ』の意味はわからなかったが、世相の移り変わりの思い出とともに、私自身の成長の傍らにはいつも音楽があつた。

『音の旅人』は、よさこい祭りの礎を築いた武政英策さんの音楽を愛する心をおして、観る者をそれぞれが感じる音の旅にいなないつつ、さわやかな感動でもって明日への希望へとつないでくれる作品だ。スケール感たっぷり、時代の匂いさえ感じられる素晴らしい楽曲の数々は、

「自分にとつての音楽」や「そのルーツ」への思いを自然に呼び起こしてくれる。

物語は、現在と過去が交錯しながら進んでいく。戦後生まれの私たちが、終戦直後や江戸期の土佐に生きた人物も演じるわけで、先人が担ってきたもの、次代に受け継いでいくものを感じ取らなければならぬ。役者である自分と役とを繋ぐのに欠かせない付帳には、登場人物の性格や生活を想像しながら、年齢や服装など、台本に書かれていない事柄を整理していく。子役の小学生も含め、全員が付帳に取り組んだのは残暑の厳しい頃だった。高知の今昔を見ることのできる写真集や、古い家族アルバムなどを持ち寄り、団員の誰もが土佐で生き抜いた人々に近づこうという努力を始めたのは、ちょうどこの頃である。

私たちの劇団には、唯一、生前の武政さんと親交のあつた西本陸空海さん（六十四歳）がいる。本人を彷彿させるやさしい口調で武政さんの人柄を紹介してくれる陸空海さんだが、彼が人生の先輩として語ってくれた、出征した父親や物語にも登場する結核の療養所まつわる当時の哀しい思い出は、私たちの心に強く響いた。陸空海さん自身、「どうし

て僕はここに来たらう」と言っているが、何か見えない力に後押しされているかのようにも思える彼の存在は、いつの間にか私たちの心のよりどころとなっている。

◆友人の言葉に励まされて
一方、私は、武政さんの思いを引き継ぐ作曲家という、架空の人物である米倉結（ダブルキャスト）を演じるのだが、ソロナンバーの難易度が高く、このキャストがかなりのプレッシャーとなっている。元来、歌うことは大好きなのだが、私にとつて歌うということが人と優劣を競うものであつた時期があり、長い間人前で歌うのが嫌になつていたので、その苦い思い出のせいなのかもしれない。

台本をいただき、本読みが始まったのは六月だったが、挫折の後に自由に音楽を愛する心を理解していく結と自分が重なつた。「音の旅人」の出演者オーディションに先駆けて開催された、演出の大原先生、小川先生お二人によるワークショップで、「自分らしく歌う」楽しさと喜びをかみしめる経験をしているからだ。二人の先生が、私の音の旅人になつていることにも気づいた。しかし、望んだキャストがいざ現実のものとなると、気負うばかりで不安が増し、

◆國友須賀先生との出会い

話は前後するが、私と市民ミュージカルとの出会いは、第一回公演の『RYOMA』にさかのぼる。劇団「はんどれつど」の二期生だったが、病気のため退団し、公演当日はボランティア要員として会場と楽屋の整理にあつた。子育てと仕事を優先し、第三回までの参加は見送つた。だが、『絵金』を観て、「なんで、あそこに私がおらんが？」という寂しさばかりが募つた。実は、ミュージカルの舞台に立ちたいという私の夢に、前述の友人はエールを送り続けてくれた。私の心情を察し「次は絶対やらないかんで」と何度も言ってくれたことが、前回公演「光の中で」への出演につながつたと言つても過言ではない。

この友のほかにも、公演を楽しみに応援してくれる友人

たちがいる。また、稽古と仕事の調整に協力してくれる上司や同僚、文句を言わず家事を引き受けてくれる家族がいる。今回で二度目となるが、スタッフや劇団の仲間以外にも、こうして私を支えてくれるたくさんの方たちの存在あっての舞台だということに、

いま改めて感謝の思いでいっぱいだ。

ところで、こうした温かな人のつながりを感じる時、ミュージカルへのあこがれを抱いたきつかけとなつた方との出会いを思い出さずにはいられない。國友須賀先生とは、大学時代に出場した、デイスコダンスのコンテストで知り合った。この出会いが元で、私は先生のダンススタジオに通い始め、歌とダンスが融合するミュージカルにあこがれるようになったのだ。須賀先生からは、ダンス以外にも、情熱や目標を持つて生きていくことの大切さなど、多くのことを教わつていく。先生との出会いがなければ、ミュージカルが私の夢にはならなかつただろう。『RYOMA』の公演終了後、夢を叶えられず、舞台の袖にボツンと立っていた私に、やさしいまなざしを向けてくれた先生（『RYOMA』の振付を担当）の顔がとて懐かしい。

◆新たな感動のステージへ

ミュージカルの舞台に立つことを夢見て二十三年、市民ミュージカルと出合つてから十九年。市民ミュージカルをとおして、いろんな方たちとの出会いと別れがあつた。『音の旅人』の公演を控え、感傷的になつている自分が少々恥ずかしい。が、スタッフの指導は、確実に私たちが

本番の成功へと導いてくれており、これまで経験しなかつた新たな感動のステージが目前にあるという期待感でわくわくしているのも事実だ。

経験者だから……と、偉そうに言うつもりはないが、これまでの市民ミュージカルは、限られたタイトなスケジュールの中で、必要な作業をどうこなすかに追われていた感がある。だが今回は、個々の役づくりが非常に丁寧なアプローチで進められ、私たち団員一人ひとり、それぞれが感じる音の旅人にいななわれながら、「今を生きる」幸せの真つただ中にある。かるぼーとのウェブサイトに設けられている『音の旅人』特設ページには、団員がしたためた練習日記が公開されているが、その文章は躍動感にあふれ、輝く笑顔がそこにある。

さあ、あなたも一緒に……音の旅へ！

「エブリバデー、レッツらゴー！」
(劇中の武政の台詞)

うかかよこ／第5回高知市民
ミュージカル『音の旅人』劇
団ototah団員

東洋町歴史年表について

原田 英祐

平成十九年八月に「東洋町歴史年表・改訂版」を発行しました。年表の概念を変える実用書を目指し、さまざまな分野に活用できる年表づくりを、と考え続け、三年前に完成したのが「東洋町歴史年表」で今回はその改訂版です。

B5版二〇〇ページ・頒価二千元で、郷土史家はもとより、公務員、教員、学術、報道、地域活動などの即戦力になると思います。また一般の人達が暇つぶしに読んでもよく、官庁、学校、図書館、喫茶店、待合室などに常備してもらいたい。

東洋町は徳島県に隣接し、関係も密接なので、町内の出来事だけでなく、高知県東部から徳島県南部にかけての事項も広く浅く収録。さらに歴代天皇、将軍、土佐藩主、首相、高知県知事など全国のあるいは県下の重要な事項の採録にもつとめました。巻末の西暦和暦千支対照表は天智三年（西暦六四四年）から現代までの一覧表です。

そして、今回の改訂版では、さらに利用しやすく編集を改善し、五〇ページの増補。同一テーマをまとめた総集編として、甲浦港の海運史、観光、人口戸数の変遷ほか。全国を騒がせた「東洋町高レベル放射性廃棄物問題」も十五ページにわたって

一部始終を採録しました。自然災害の採録にもつとめ、四国関係のおもな地震一覧表、台風、豪雨の記録。道路や橋梁などの土木史も国土交通省以上の記録となっています。

本書の最大の特徴は索引欄の充実です。人物の索引欄はピンク色紙で五十音順に十二ページ（二ページ約百人）、事項の索引欄はグリーン紙で四十ページ（二ページ約百項目）詳細な索引の活用で、手軽に引き出すことができます。

ここで二つの重要事項を紹介してみよう。

土佐日記について

一般的に土佐日記は、紀貫之が国司の任を解かれて、承平四年（九三四）十二月二十一日に土佐を發ち、翌年二月に京都に着くまでの「航海日記」だと思われています。

しかし、貫之が実際に土佐国司の任を解かれたのは、承平四年（九三四）四月二十九日であり、その後、翌年二月に京都に着くまでの「航海日記」だと思われています。つまり、初夏の頃に航海したのです。それなのに、土佐日記では真冬の土佐海岸の様子が、ほぼ正確に書かれています。なぜだろう？その答は、貫之が土佐国司に任命されたのが延長八年

（九三〇）一月十二日であり、その後、土佐入国の真冬の船旅を實際に体験。それを土佐日記という創作文学では、土佐出国の筋書きに置き換えたのです。私の歴史年表では、次のように記しています。

①延長八年（九三〇）一月十二日、紀貫之が土佐国司に任命され、土佐に下る。この時の、真冬の航海経験が土佐日記執筆の基礎知識になったと推定される。

②承平四年（九三四）四月二十九日、貫之が土佐国司の任を解かれる。實際に京都に帰ったのはこの時期だったと思われる。

③承平四年（九三四）十二月二十一日、紀貫之著「土佐日記」のストーリーが始まる。この日、土佐日記の主人公は土佐守の任が解かれ帰京の行動をおこす。（土佐日記は創作ドラマ。真冬の航海風景は土佐国司として赴任する際の体験が基礎知識になっていると推定）

（途中省略）

④承平五年（九三五）一月二十一日土佐日記の船が「むろつ」を發つて

「よんべのとまり」に着き一泊する。「むろつ」は室戸市室津、「よんべのとまり」は室戸市佐喜浜と推定される。ほかに野根、甲浦、宍喰などとする説もある。（当時の航海能力と当日の気象からして佐喜浜までが限界と推定）

⑤二十二日、「よんべのとまり」を發つて「ことどまり」に着き一泊する。「ことどまり」は東洋町甲浦と推定される。

⑥二十三日、土左日記の船が「ことどまり」を發つて海賊の勢力圏を縦断し、次の泊まり地に向かう。多くの説は、この日は航海せず、「ことどまり」にもう一泊としている。しかし日記文に「このわたり（今日の渡り、という意味）海賊のおそりありと言えば神仏を祈る」とあるように、この日は海賊の出没する海域を通過。海賊とは旧脚昨別（東洋町（海南町）の沿岸住民のことで、プロの海賊ではないのだが、ドラマを劇的に展開するための作者の作為だろう）。

（解説・ストーリーが不自然に宿泊を重ねるのは「子の日」に「春日野」の阿波国春日部屯倉や「こまつもが

な」の小松島、徳島小松海岸付近を通過する設定にして、日程を合わせ、語呂合わせの洒落つ気を記述する作為が感じられる）

江藤新平について

明治七年二月、九州佐賀の乱に敗れた元司法卿・江藤新平は高知県の板垣退助らを頼って潜入。そして、宿毛から甲浦まで高知県の西端から東端まで、延々と逃亡を続けたが、三月二十九日ついに甲浦で捕縛され翌月には佐賀で処刑されました。

新平の、高知県での逃走経路は、著書によって様々。その理由は、新平が捕縛後の取り調べで、デタラメの供述をしたからでしょうか。

「〇日は道端の納屋に寝て、△日は山中の岩陰で寝た」など供述し、実際に世話になった人の名前などは出さなかった。名前が出れば、その人達にも国賊として罪が及ぶことになり。また、逃走を助けた人達も、あえて名乗り出ず、沈黙を通したことと思われ。そんなことで、新平の逃走経路解明は、まだまだ不完全。私も気長に真相発掘に努めています。ただひとつ言えることは、新平は民主国家建設の功労者であり、自由民権運動の

提唱者として高知県では支持者が多く、それらの人々に温かく支えられながら逃走。捕縛隊も強いて逮捕せず、後を追うだけだったようです。願わくば他県へ脱出させたい。しかし、全国指名手配の重罪人であり、ついに甲浦（東洋町）で捕縛。

私の歴史年表には、新平の足跡は詳細に記載していません。そのことが残念ですが、かなり真相が見えてきたので、次回には記載したいものです。

（はらだえいすけ／郷土史家）

歴史年表の問い合わせは、
電話〇八八七二二八一八二〇
まで

第18回 高知出版学術賞

推薦募集

「高知出版学術賞」は当該年における最も優れた学術出版を顕彰し、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。皆さまからの該当図書のご推薦をお待ちしています。

【対象】

次の事項をみたくないので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

- ① 高知県在住者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
- ② 二〇〇七年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。所定の推薦書に必要事項を記入し、該当図書二冊を添えて、審査委員会まで提出してください（図書は返却しません）。なお、推薦書はご請求いただければお送りします。

【締切】

平成二十年一月三十一日

【表彰】

三点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金十万円

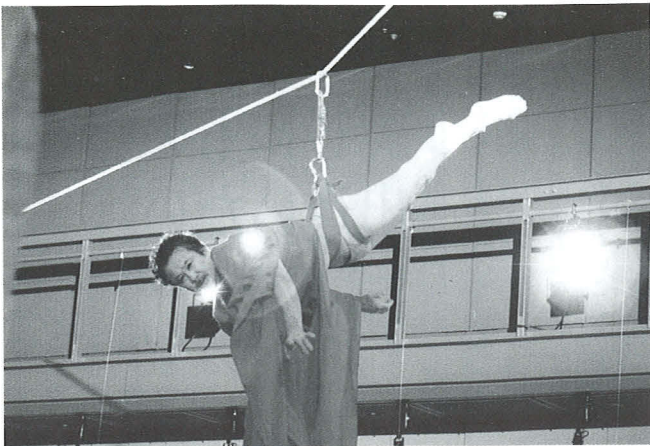
【推薦・お問い合わせ先】

（財）高知市文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会
TEL 〇八八八三三五〇七一

CAT?

こんな美術展もある

小原 義也



去る十月中旬、神奈川県相模原市グリーンホール相模大野で「現代美術2007CAT展」が会期一週間一千六百人余（幼稚園児から一般市民）の鑑賞者を集め終了した。といっても何の事やらお分かり頂けないと思う。

通称CAT展。猫の英語読みと同じ展覽会名だが正式には、[CONTEMPORARY ART TRIAL]で文字通り現代美術家の自作へのトライでもあり美術界への挑戦の意味を込めてネーミングしたもので、わたしの猫好きということもあってその英名の頭文字を取りCATをニックネームとした。犬のように従順ではなく、時には飼い主にさえ爪をたてるし、気ままに自由に行動する猫の気性がこのグループに相応しく思えたからである。

そもそもこのグループを立ち上げる以前、十年近く地元作家の集まりである相模原芸術家協会の創立にかかわり運営委員長などやっていたのだが、思うところあり退会。同協会会員で国内外で活躍の主力メンバー七人の現代美術家が呼応、上記の展覽会を立ち上げ、わたしをグループ代表として正に徒手空拳各自身銭を切つてのスタートであった。

覧会の大小を問わず回を重ねるうちにビエラルキーができ全体の緊張感も薄れ弛緩してくる、その悪しき例があまたある美術団体展を見れば分かることである。

展示に当たっては予めホール側の照明や会場スタッフとわたしとの間で打ち合わせの上取りかかるが、インスタレーションや立体作品は搬入当日にならないと見当がつかないものもある、そこは経験と会場構成、演出をやるわたしと照明スタッフの腕の見せ所でもある。搬入陳列日は立体、平面を問わずわたしの指示に従って全員で作品配置をする。椅子を外し階段状になっているホール全体の床面がコントロール室の操作で一斉にせり上がり天井から八メートルの位置で全面フラットな床になる光景は圧巻である。

わたしの考えは、個々の作品は役者でありそれらをいかに良いバランスで配置し作品の個性を引き出すか、その上で会場全体の空間からいかにCAT展のエネルギーを観客に感じてもらえるかである。そのためにはこの劇場空間こそ打って付けてあり八メートルの中空から垂れ下

もともとわたしは既成の美術団体の在り方に疑問をもち批判してきたが、七十万人（当時）になろうという横浜市、川崎市に次ぐ神奈川県第三の中核都市相模原市の文化行政への刺激と同時に市の知名度アップのためにはもつと外に向かつて発信していくことが重要と考えた。例えば、地方の一地域に過ぎない佐渡島に本拠地を置き、全国にその活動を展開した和太鼓のグループ「鬼太鼓座」。その後「鼓童」としてその活動は日本が世界に誇るグループに発展。

「鼓童」には及ぶべくもないが、わたしのイメージとしては相模原市を拠点とした美術の「鬼太鼓座」であり「鼓童」を目指し、併せてとかく難解といわれる現代美術について、何とか一般市民の理解のよすがになればとの思いで会場構成、参加作家の選考など、全て現代美術に特化した美術展を構想した。従って、参加作家は東京、神奈川県、埼玉など市以外の首都圏からの作家が多く、時には高知、北海道からも参加を頂いた。

CAT展の理念は、権力や権威におもねらず芸術家としての本文に立つた作品、床面二メートルに浮き上がったかに見える立体作品、平面上に二〇〇号大以上の大作が中空に浮かせるように展示されている。基本照明は灯りを四〇％に落とし天井全体に配置されている演劇用の大型スポットライトを個々の作品に効果的に当て正に会場全体を幻想的な空間として演出している。そのほか前衛舞踏などのパフォーマンスや、出品作家と鑑賞者とのトークショーなどを同時に開いている。

とにかく、ここグリーンホール相模原多目的ホールでこそその演出であり、他に例を見ない展示であると自負している。とは言え、ここまでくるには幾多の困難があった。先ず資金面で、参加費やわたしたちの身銭程度では会場費やポスター・DM・カタログなど印刷費、郵送費で手一杯。必要とする照明スポットの数が多く高額になるためとても賄えず、一回展から三回展までは基本照明中心で開催するしかなく、わたしの考える演出とは程遠く、心ならずも出品作家にも多くの犠牲を強いることとなった。その間、文化庁や神奈川県などの文化振興基金へ申し込みもし若干の援助も受けたが毎回と



ち、熱い志を持って行動することである。また展示の最大の特徴は、先ず会場が多目的ホールとは言え客席数六百人、天井高十メートル、照明機器等百基余、その他床面やセリのコントロール室といった本来演劇や音楽公演を主体としたシアターであり、従来型の美術展には全く不向きな空間であるが、それを逆手にとり一般の美術館やギャラリーでは不可能な作品展示をやっていることである。次に本年で言えば立体作品、イ

いう訳にはいかず、わたしの独断専行、メンバーには事後承諾ということとで、四年前ホールを運営する相模原市民文化財団との共催を持ちかけ、財団と交渉、同時に財団理事長でもある市長に直談判、何度かの交渉の結果会場経費の折半ということで成立、その上グリーンホール開催事業の年中行事の一つに組み入れられることとなり、ようやく前記の展示や演出も可能になったわけである。

発足七年を過ぎどうか軌道に乗ったとはいえ、この先だけ続けられるか、いたずらに長ければ良いというものではない。現時点では十回を目途にして一度見直そうと思っている。従ってそれまでには代表の任も若いメンバーの一人に繋いでいこうと考えている。

昨年十一月、わたしの出身地である香美市の市立美術館でCAT展が開催された。予算が取れなくて平面作品だけとなったがこちらの多目的ホールとほぼ同じ床面積と天井高があり、照明はともかくCAT展のエネルギーの一端は感じてもらえたのではないかと思う。

（おはらよしや / 現代美術CAT代表）

美しいものと 出逢いたい

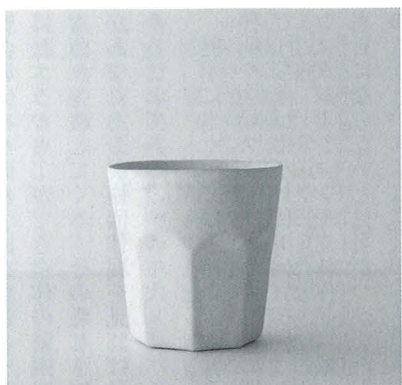
—ギャラリーM2—

中西ルミ子

ンブルな空間です。私の仕事は物を見ること、そして作り手の人がらや感性を計ることです。共感できる喜びはこの上なく幸せなことです。もちろんDMもM2らしく仕上げ発信しています。この仕事を始めて十六年目となりますが、振り返りますと選ぶ力や使い育てる力のある人達が増えてとても楽しんでいただけていると思います。

心が震えるような感動をしたい。そしてワクワクして暮らすための道具を見つけないで生活も楽しくないのでないでしょうか。

毎月一回のペースで展覧会を企画していくのですが、二月十六日から二月二十四日まで「KRANK」



n M2」を準備しています。南仏の道具が集まります。アンティーク家具、テーブル、椅子、ライト、ポット、コーヒーマル……etc. 国を越えても美しい道具は、暮らしのなかでインテリアとして生かされています。

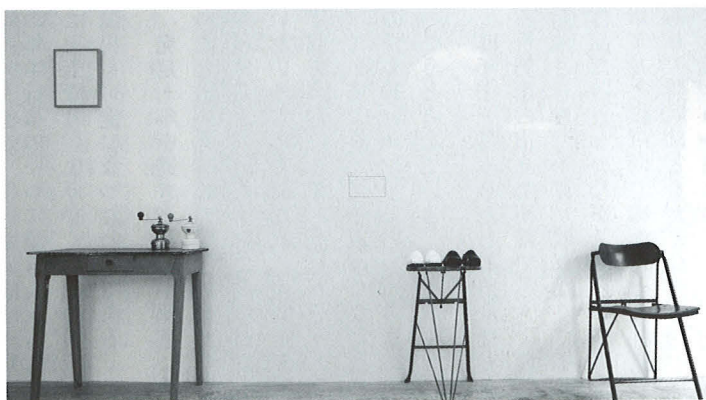
呉服商を営む家で生まれ、着物・茶道具・絵画・書に囲まれ育った事も私が美術を学ぶ方向へと導いてくれました。

好奇心は余すところなく本物を見る機会をそして本物をみる力を養うこととなりました。

結婚し東京で二十六年間生活した事もその間に東京国立博物館でボランティアを経験した事も、すべて今の私につながっているのだと思います。衣食住どれも大事にしていく事でバランスの良い暮らしができるのではないのでしょうか。

その暮らしのなかに心を満たすその道具をプラスする事で楽しくなる。そんな仕事を続けられる事はとても幸せだと思います。日常生活のなかにアートを取り入れる提案をするた

めに私自身いつもワクワクしていたと思います。(なかにしるみこ/ギャラリー経営)



ギャラリーM2
高知市はりまや町二一八一十二
TEL 〇八八—八八五—四六八九
水曜日定休

言葉

の現場から⑦

「スルマ族」森羅万象が名に

岩井信子

東アフリカ、エチオピアの西南奥地、スーダン、ケニアの国境山麓に住むスルマ族は、人類学者をして「地球上で最も原始的な暮らしを営む」と言わしめる少数民族である。私はこの村に毎年通い、住み込むうち、三年前に族の一員として迎えられ、スルマ名をもらい、村に家も持つことになった。

スルマ族は宗教を持たない。彼らの暮らしには宗教的な戒律も依存もない。だから割礼など、わけても悲惨な女子割礼など彼らとは無縁である。アフリカ奥地、大自然の懐に、男は素っ裸、女は牛や山羊の皮をまとい、石器時代さながらにおおらかに暮らしている。

エチオピアは世界一牛の多い国である。多いだけではない。この地の牛は体毛の色、模様が実に多様。個体毎に異なり、二頭として同じ牛はいない。例えば、真っ黒の胴体に真っ白いベルトを巻いたような牛。両

の目と首のまわりが白いバンドもどき。かと思えば、全身これ桜色！にも出会う。

スルマ族は牛に生きる民族である。牛は単なる財産ではない。牛はスルマの男にとって絶対的なステータスシンボルである。牛を売買せず、食料とせず、荷役・耕作のひとつさせず、ひたすら慈しむ。牛はスルマの男が命と誇りをかける存在である。敵対する他民族との部族間闘争は、牛や放牧地の争奪によって起きる、族の存亡の危機。このとき彼らは命をかけて牛を死守する。部族間の争いが熾烈を極めた殺戮に及ぶのはそれ故である。

牛は若者が率いて朝、放牧に出、夕方村の牛囲いへ帰る。一条纏わぬ裸身を太陽に灼き、高らかに牛の讃歌を吟じつつ若者は群れを行く。男スルマ、至福のときである。

牛の世話は男の子の仕事。六、七歳ごろから男の子は牛囲いで牛と起

居を共にする。夕方には甲斐がいしく焚火をして牛を迎え、母牛の腹の下にもぐって搾乳をする。少年が乳首を握ると濃厚なミルクがほとばしる。牛は目を細めてこの小さい掌に巨体を預けている。ヒョウタンの器に一つ搾ると、待ちかねていた子牛と額を合わせ乳首を含む。少年の夕食である。夜は牛の間で牛に寄り添って眠り、朝は夜が白むより早く、放牧の仕度にかかる。

九〜十二歳ごろ、男の子は雄の子牛一頭を与えられる。一人前の男として自立する証である。この牛は将来、この子の牛の群れをリードする。そして、この日から、男の子はこの牛の名を名乗る。幼名はあるがこの牛の名がスルマの男の公式名となる。

牛の名は、毛色やその模様で決まる。例えばコルデイという名の牛は真っ黒い全身に白い点々模様である。黒地に白の点々。スルマ語で星空を言う。人工照明は一切無い、無限の闇に星がきらめく夜。その神秘的な夜空、コルデイ。その星空を牛の名に。白牛はホリといい太陽の意。コ口という黒牛は雨の意。灰褐色ギダギは大地の意。

ルデイという名の牛は白い体の頭と腰が黒い。白地に一對の黒模様は

スルマ語で目のこと。ホグイ・デルデイという名は白い胴に頭と腰の黒い、雄子牛のことである。乾期、彼らは草原に野火を放つ。新鮮な牧草を得るために。やがて見渡す限りの焦土にみずみずしい新緑が萌える。ティリ・イデイという名は焦土と群生する若芽の、まだらな大地の様相のことである。

スルマ族は大自然の森羅万象を、色と模様でとらえ、それを自在に組み合わせた複合語で牛を表現する。スルマの男にとって牛こそは自分を表現する「作品」であり、牛は自身自身そのものであり、牛の名を名乗ることは即ち大自然に一体化して生きる意志の証である。私は彼らのこの感性と認識、そこに生まれる言葉に惹かれてやまない。

(いわいのぶこ/民俗・作法研究家)



日本の資本主義発展に尽力
— 金子直吉 —

広谷 喜十郎

本年は子年である。昔は、特に白鼠が吉兆の現れとして、人びとに歓迎されていた。白鼠は神の使いで、世の中に幸福をもたらしてくれると信じられていた。正月には、米俵の上に坐っている大黒さまと傍に白鼠を描いた掛け軸が、よく床の間にかけられた。大黒さまに忠実に仕える白鼠は、主家に献身的に仕える家僕を意味するといわれている。

高知県出身の実業家・金子直吉が、神戸の鈴木商店に働いていた時分、俳号に「白鼠」と付けたのは、それを端的に表現したものである。



金子直吉 (1950)
小磯良平筆

作家・城山三郎氏は、店のために忠実に働く直吉の姿から、『鼠』という題名の小説を書いた。

金子直吉は、高知県吾川郡名野川村(現・仁淀川町)出身で、少年時代に家が没落し、高知市に移住して質屋に丁稚奉公をした。さらに、明治十九年神戸に出て、鈴木商店に雇われる。同二十七年に鈴木岩治郎が亡くなる。未亡人・よねの厚い信頼を受けて鈴木商店の経営にあたり、めざましい活躍を始める。その後、工業部門へも多角的な進出を計り、第一次世界大戦期の国際市場において大々的な商業取引をおこなった。

桂芳男著『総合商社の源流鈴木商店』、沢野恵之著『史上最大の仕事師』などによると、一時期、三井や三菱に追いつかんばかりの勢いを示す商業活動が紹介されている。桂芳男氏の研究によると、大正時代の財閥の花形として登場した鈴木商店系の企業集団は、最盛期に六十五社、

従業員総数二万五千人にも上る。大正六年には、貿易年商十五億四千万円となり、三井物産の十一億円を抜いて、トップの座を占めるまでになる。が、それも束の間、第一次大戦後の経済不振を乗り越えることができず、鈴木商店はやがて倒産に追い込まれて、その華々しい歴史をとじることになる。

だが、金子直吉が育てた企業と人物は、その後のわが国の工業化の発展に大きな役割を果たしている。

直吉の少年時代は、家が貧しく〈朝は掃いたり拭いたり掃除から昼は店の使い走りや子守りまでやらされ、夜は主人の按摩や挽臼で粉をひかされる〉(『金子直吉伝』)といった丁稚小僧の生活ぶりや、みんなから無学文盲だ、貧乏だ、馬鹿だとのしられていた。その直吉がどこで勉強したか。十四才の時、質屋に奉公することになった。質屋は座つての商売だから、読書する機会がで

た。質物の軍記物や翻訳物の本を手当り次第に多読し、遂には、孫子の兵法書まで熟読することができた。〈此処を図書館のようにして独学勉強し飽くことを知らなかった(略)その中手紙も書け、大抵な書いた物も読める程度になり、徐々に成功の素因が出来て俺も同じ人間だから世の中に出たら相当の仕事は必ずやれるという確信がついて来た〉と、言っているように、商売しながら生きた学問を身につけたのである。それに、いつも母親から弱者いじめをするなどと言われていたという。

直吉は、昭和十九年二月二十七日逝去。享年七十九。墓は神戸市追谷と高知市筆山にある。命日には、今でも関係した会社の人々が訪れるという。

ひろたにきじゅうろう
土佐史研究家

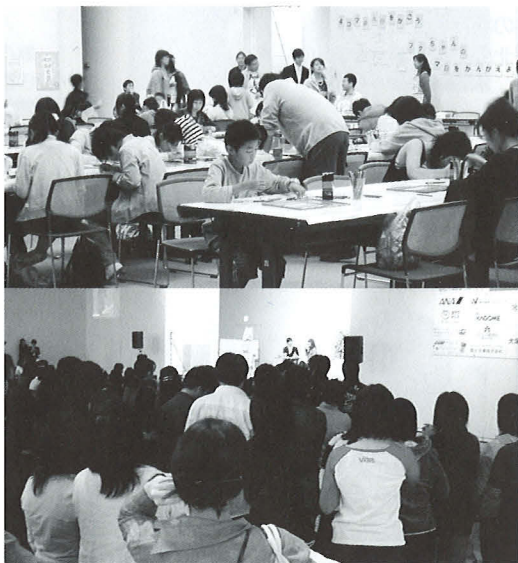
高知市文化プラザ かるぽーと
11月~12月の事業のご報告

まんさい-こうちまんがフェスティバル2007

11月3日・4日の2日間、5回目となる「まんさい-こうちまんがフェスティバル2007」を高知市文化プラザかるぽーと7階市民ギャラリーほかで開催しました。

今年は、新規イベントとして「まんがウルトラゲーム&クイズ」やまんが家ワークショップ「まんが工房」、「和紙に描いた原画とアニメ」などが登場し、北広場ではフリーマーケット「まんさいマルシェ」も開催しました。声優トークショー&サイン会は「朴璐美」さんが登場し大人気を博していました。

その他にも「まんが100秒バトル」や座談会などのステージイベント、定番の「まんがで遊ぼう!」をはじめ多彩なイベントコーナーを開催し、親子連れや子どもたち延べ1万4千人が訪れ、まんがに親しみながら楽しいひと時を過ごしていました。



ミュージックストリーム2007

12月2日曜日、高知市文化プラザかるぽーと大ホールで「ミュージックストリーム2007」が開催しました。四回目の開催となるこの催しは、音楽コンクールの四国・全国大会で優秀な成績を取った県内音楽団体の活躍とその実力を市民に紹介する演奏会です。今年は第55回全日本吹奏楽コンクール全国大会に出場した鏡野吹奏楽団、第60回全日本合唱コンクール四国支部大会でともに金賞を受賞した高知学芸中学高等学校コーラス部、高知県立高知丸の内高等学校音楽科の三団体が出場しました。

大会での課題曲を中心に、コンクールの進行を再現したコーナーや、懐かしの名曲を踊りとともに楽しむコーナーなど、各団体がそれぞれの個性を生かした曲目を演奏し、観客は実力に裏打ちされた楽しいステージを満喫していました。





景観考

タケムラナオヤ

浦戸湾の景

116

むかしむかし、フェリーに乗って浦戸湾に入ると、左手に広がるはずの横浜の町並みは海辺の森に隠されて、浜から烏帽子の山並みまでが一面の山野のように見えた。この印象はとて強烈で、右手の造船所街と対照的な風景だった。▼湾の東を車で走れば、海の上に高知の街が浮かぶ。五台山から眺めれば、海から川、山へとゆるやかに繋がる狭い平野に、高知の街があることがよくわかる。改めて、この街は水と縁が切れないところなんだと思う。▼だけど、海や川と街は、高い堤防で区切られる。津波と切っても離せないこの街の宿命だけど、もう少し低ければ、もう少し自己主張のないものならば。▼こんなにも目の間に大きな海があるのに、そのことを感じられない街とは。

風伯

自分の温暖化非対策

れたなかで私の心にグサリと突き刺さった言葉がある。
「環境問題に無関心なのは私たち若者ではなく、むしろ大人たちだ！」
決して私に向かっていったのではないことは分かるが、勝手に私の胸は痛んだ。確かに、個人差はあるが、環境問題に敏

いま温暖化防止対策の「ポスト京都」に向けた議論が行なわれている。これは国の問題であると同時に、個人がどう生きるかの問いかけである。個人の意識が高くなれば、地球はきっと壊滅してしまわない。
先日二十二歳になる女性が話をしてく

感なのはむしろ若い世代で、仕事に忙しい壮年から中年、そして老年に至るまでの私も含めた年代は、地球規模で進行しつつある温暖化への危機意識が少くないように思える。
自分自身を振り返ってみれば、心のどこかで地球は自分の生きていく間、三十四年か四十年は大丈夫だろうという声が聞こえてくる。後はどうでもいいとは思っていないのだが、フツツフツツフツツ。『ゴミの分別にしてもあまり意識が向いていないし、年をとると、暑さ寒さが身に染みて、冷暖房が欠かせない私ではある。すぐ近くの買い物でさえ、「今日は寒いなあ」「買い物荷物が重たいなあ」、などといった車を使うのである(反省)。若いころ貧しい時代を生きてきた私たちが中高年が、いまやつつかんだ豊か近代的な暮らしを続けたいというのは、貧しい考えであることは充分承知してはいるのだが……。
(夏の果改め初時雨)

第154回 市民映画会

ボルベール<帰郷>

「母」「娘」「女」と表情を変えながら人生をたくましく生きる女性たちを、タンゴの名曲にのせて描き上げた珠玉のヒューマンドラマ。



プロヴァンスの贈りもの

陽光ふりそそぐ南仏プロヴァンス。思いがけない休暇から、とびきりの恋が生まれた。すべてのひとを魅了するロマンティックラブストーリー。



© 2006 Twentieth Century Fox

と き：1月31日(木)・2月1日(金)
ところ：高知市文化プラザかるぼーと大ホール
上映時間(両日とも)
ボルベール ①11:00 ②15:15 ③19:30
プロヴァンス ①13:05 ②17:25
料 金：一般前売り1,300円(当日1,500円)
割引(前売り・当日とも)1,000円
※学生証、長寿手帳、障害者手帳などをご持参の方は割引料金
※前売り券は、かるぼーとほか市内各プレイガイドおよび指定のサニーマートで販売。
※お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 企画事業課 (088-883-5071)

今号の表紙

「朴拭漆銀線象嵌箱」 吉光誠之
この作品は「山」や「樹木」の形をモチーフとして制作している。木工芸の素材である「木」は、自然界に存在している状態、すなわち自然に生え育っている状態が一番美しい姿であると私は考える。
そのような考えをもとに、「人間の都合で勝手に切り刻まれた樹木を、「箱」の形を借りてもう一度美しい姿に表現したい…」と考えて制作した。
(よしみつせい)

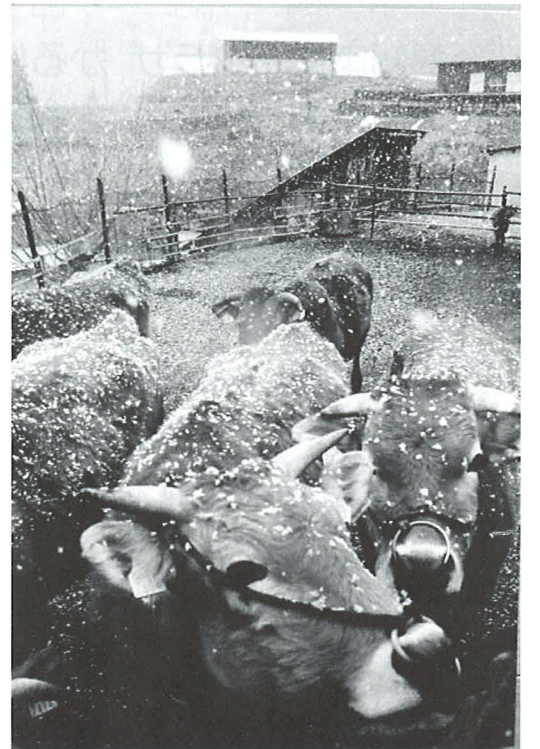
高知を撮る

第23回写真コンテスト入賞作品

春を持つ嶺北牛 (平成18年 土佐町立割)

上杉 欣弘

冬の寒空に元気な嶺北の土佐褐色牛。



「若者もするブログといふものを、わたししてみてもいいなり」
会社のホームページのリニューアルに際して、ブログをコンテンツに加えた。発信することが生業なのに、自分のブログは一番後回し。まさに「細屋の白袴」だ。
いまだに原稿をペンド書いている団塊世代の代表者は、ブログはちゃらちゃらしてるからな〜」と、いい顔をしながら、(はいはい、ちゃらちゃらしてないブログを書けってことね)とムツとしながらもよく聞けば、「日記なのに公開するというのが気に入らない」。今やブログを書いている人は三百万人をゆうに超えている。もはやこれは新しい発信手段であって、イコール日記だと思っはいけない。

「ブログ」



風俗歳時記

週二〜三回程度のゆるやかな目標で四か月。また投げ出してはいない。会社のブログなので、会社のありようを伝えることを旨としているが、仕事と遊びが交錯している生活ゆえ、ゆるに超えている。
あるプロジェクトでブログを書くことになった。
想いはホットに、筆致は軽く――ブログの特性を活かして、「読まれる」ちよっぴりの緊張感を持って、書き続けられたらいいと思う。
(日向夏)
いつも遊んでいるように思われるかもしれない。振り返ると、日常の些細なハッピーを書き綴っている。
ブログの影響で、瞬間の想いを言葉に置き換えようと努力するようになった。「うわー、すごい」と思ったら、どうす〜って、どう表現したら伝わるかを考える。デジタルカメラも、使う頻度が高まった。これは、自分の仕事のスキルアップにつながっているはず。また、仲のいい友だちのブログを覗く習慣もついた。やっていることや考えていることをリアルタイムで知ることができ、久しぶりに会っても「ブログ読んでんだけど……」から話が始まる。
実は、かの代表者も、

Musical Oto no Tabibito

悠久の時の中で、
私たちは生きている。

高知市文化プラザ開館5周年記念事業
武政英策生誕100年記念 第5回高知市民ミュージカル「音の旅人」

Musical Oto no Tabibito

音の旅人

2008年 2月10日 [日] ・ 2月11日 [月・祝]

① 13:30 開場 14:00 開演 ② 18:00 開場 18:30 開演 ③ 13:30 開場 14:00 開演

高知市文化プラザかるぼーと大ホール

- 入場料：全席自由 前売り3,000円 当日3,500円 (未就学児 無料) 11月24日 [土] 販売開始
- 指定り券販売所：高知市文化プラザミュージアムショップ 089-883-9082 / 高知プレイガイド 088-825-4335 / 高知大丸プレイガイド 088-825-2191 / 高知県立歴史文化ホール 099-824-5321 / 高知県立美術館ミュージアムショップ 089-866-8118 / ツタヤ各店 (一部店舗を除く) / TSUTAYA各店
- 主催：財団法人高知市文化振興事業団 / 高知新聞社
- 後援：高知市 / 高知市教育委員会 / 高知県 / 高知県教育委員会 / NHK高知放送局 / RKC高知放送 / KUTVテレビ高知 / KSSさんさんテレビ / KCB高知ケーブルテレビ / エフエム高知 / 朝日新聞高知総局 / 読売新聞高知支局 / 毎日新聞高知支局 / 高知商工会議所 / よさこい 輝り振興会 / 高知市商店街振興組合連合会 / 高知市文化協会 / 高知県高等学校PTA連合会 / 高知県小中学校PTA連合会 / 高知県高等学校文化連盟 / 高知演劇ネットワーク・演劇
- 協賛：財団法人地域創造 (高知市文化プラザ活性化事業) / 財団法人高知新聞厚生文化事業団
- お問い合わせ：財団法人高知市文化振興事業団 089-883-5071 <http://www.bunkaplaza.or.jp>

M 財団法人高知市文化振興事業団

かるぼーと